

## 要 約

思春期の性行動の中でも心身共に影響力の大きい、そして、次の世代、即ち、生まれ出た子供たちの幸せにもつながる若年妊娠。もはや、特定の、問題児の非行としての性交・妊娠ではなく、身近な、何処にでもいる子供たちに起こり得る問題である。幼児期から、性と性・命の尊さを、しっかり認識させるとともに、若年妊娠について、早急に適当な支援対策を講じることが必要である。今回、思春期にかかわる組織の全国的調査・青少年の性意識調査、若年妊娠の医学的・社会的見地からの調査を行った。その結果得られた思春期対策の充実度と問題点、青少年の性に対する認識、若年妊娠の現状と問題点と、今後の対策を報告する。

見出し語：10代の性行動、性教育、10代の性意識、10代妊娠、10代出産

研究方法：昨年度の思春期の性行動に関する文献検索・全国的現状調査、性教育に関する予備的意識調査、その他を基に、次の調査を行った。

- [A] 全国における思春期外来・相談施設・思春期保健指導員・保健所その他の施設の抱えている問題点（アンケート調査）
- [B] 青少年の性意識（アンケート調査）
- [C] 若年妊娠の背景・現状・問題点（聞き取り調査その他）

研究協力者は、それぞれの分野で思春期の若者と深い関わりを持って来た人達である。即ち、

- 1) 幼・小・中・高・大学で、直接性教育に携わる者。
- 2) 性教育に携わる人びと（学校担任・養護教諭・看護婦・保健婦や思春期の子供達を持つ親その他）を指導する者。
- 3) 臨床の場で若年妊娠に対し医学的・社会的支援活動を行う者。
- 4) 妊娠・出産に戸惑う若者に、医療者・福祉関係へ橋渡しをする者
- 5) 若年妊娠の諸問題を社会的に検討している者。
- 6) 公衆衛生の立場から多面的に青少年の性行動を検討する者。

## 調査および結果

[A] 全国における思春期外来・相談施設・思春期保健指導員・保健所その他の施設の抱えている問題点（アンケート調査）

[1] 保健所における思春期保健事業の実施状況、および効果的な実施の条件に関する調査。詳細は（資料1）参照。

①保健所業務の中の思春期保健事業の実施状況、および効果的な実施の条件に関するアンケート調査を行った。825保健所を対象の本調査に対する予備調査、23保健所の結果から  
\*一保健所あたりの職員数とその職種の内訳：  
最小29～89人（医師：1～4人、保健婦：6～24人、助産婦：0～3人）

\*思春期保健相談員・認定者のいる保健所数と人数：9保健所（1～6人）

②厚生省事業「思春期教室」について

\*実施状況・テーマ・参加対象・講師の種類

\*「思春期教室」実施が実施されなかった理由・今後実施するに当たっての問題点・より効果的なための条件：他に優先事業あり・必要性がない・スタッフ・予算の問題・指示がなかった。

③厚生省事業「保健福祉体験学習」の実施状況  
\* H3、4年度10か所で行われ、3～4回実施（述参加人数136～223）であった。

\*実施されなかった理由、今後実施するに当たっての問題点・より効果的なための条件：必要性がない、スタッフ・予算の問題・関連機関との体制づくりの問題。内部での他局との抵触・調整の必要性。

④その他の思春期保健事業の実施状況

⑤保健所独自の思春期保健事業の実施状況

⑥日常保健所活動の中の思春期保健事業への対応

## 結 果

今後の活動に対する問題点・より効果的な条件として、下記の項目が上げられている。

①保健所内部、および外部の行政、全体の縦割りを越えた問題として思春期問題を取り上げたい

②連携問題

\* 助産婦・産婦人科医：持ち味を生かした連携

\* 教育委員会・PTA：学校の講演会・検討会に保健所の参加。

\* 学校教諭：交流を深め、問題の早期発見・早期援助に役立てる。

\* このほかに、ネットワーク作りを必要とするものとして、民生委員・民間団体・家庭裁判所・児童相談所・青少年相談センター、警察署防犯課 etc…。現に定期的連絡会議を持つ、学校側・教育委員会が中心になり人集めをすると参加率がよい、などの報告もある。

③専門的な知識の不足

\* 研修の必要性  
\* 医療機関（公立）との連携  
\* 専門相談員の資格修得

④専門的な職員の配置

\* 思春期相談員としての資格を持つ医師・保健婦・心理相談員  
\* 十分な専門相談としての時間・相談員の配置  
\* 家庭・学校・専門機関との連携

⑤保健所が思春期相談事業をしているというPR

\* 気軽な窓口・個別の対応・相談後の受け皿（学校・医療機関）

⑥その他：講師の人材不足・予算不足でよい講師を呼べない

[2] 健全母性育成事業（思春期保健対策）現状と課題：本事業までの経緯・実際・現状の詳細については、（資料2）参照。

①日本家族計画協会における思春期保健相談について。

1982年9月、思春期の子供たち対象の電話相談開始。

1984年7月、思春期クリニック（婦人科）開設。

平成4年、年間、電話相談件数 5,265（男3,563、女1,702）思春期クリニック来所、述2,010

\* 性の相談内容が10年1日のごとく、「自慰」「性器の大小」「包茎」「月経」「妊娠」などであることからみて、思春期相談に期待されるものは、「誤った知識に振り回されている、本当のことが知りたい子供たちへの正しい情報提供・必要な相談施設への紹介」であろう。

\* 電話相談とクリニック併設の利点  
気軽にできる電話相談を媒介にし、難しいことはクリニックへと誘導できる。早期

発見・早期対策につながる。

②全国に様々な機関が相談窓口を開始している（表：健全母性育成事業実施都道府県市の現状、その1、その2、その3、その4）（都内）。

③今後の課題として、

\* 子供のニーズに答えているか。

緊急性・即時性が必要なのに相談日が週1回～月2回しかない。

1年間の相談件数が1,000件にも満たないところが多い。

\* 連携の必要性。

学校・PTA・児童相談所・福祉関係。

\* 相談内容のレベルの均一化。

マニュアルの作成。

\* 相談実績を上げるため努力。

子供達へのPRの必要性。チラシ・カード・小冊子配布。

\* 幅広いスタッフの必要性。

カウンセラー・ソーシャルワーカー

[B] 青少年の性意識（アンケート調査）

◎調査の視点

性的自立の度合いを知る。

- 1) からだについての科学的な知識。
- 2) 性自認（からだ観）。
- 3) 性行動・性意識。

◎調査方法

1) 調査対象…普通高校・男女共学・中核都市の2年生。

A（進学校）1高2クラス×6（600人）

B（平均校）1高2クラス×6（600人）

2) 郵送調査…性教育協会会員の勤務校に依頼。

3) 調査票…マークシート方式。

◎調査項目（別冊 参照）

- 1) からだについての科学的な知識…5問。
- 2) 性自認（からだ観）……………8問。
- 3) 性行動・性意識……………4問。

◎結果 別冊 10項挿入

[C] 若年妊娠の背景・現状・問題点（聞き取り調査その他）

[1] モデル地区における若年妊娠の聞き取り調査：前年度、予備検討を行った沖縄八重山保健所の聞き取り調査を参考に独自の調査書を作成した（資料5参照）。

調査および結果：

▲比較の対象群として、一般出産者の調査も、ほぼ同時に行っている。

## －若年出産女性の生活と 育児に関する調査－

### 集計結果報告

はじめに

若年出産者のなかには、妊娠・出産・育児の経過のなかで著しい困難を抱えるもの（ハイリスク若年出産者）が存在する。本研究では、その実態を明らかにするとともに、そうした事態に至る要因をさぐり、問題解決（さらには予防）の方法を明らかにすることをねらいとしている。

### I. 調査対象者の分析

#### 1. 調査対象者の基本的属性

今回の調査対象者は平成元年から5年までに10代で出産した女性94名である。ここでは調査対象者全体の概要をあきらかにする。

対象者である母親の年齢は最小年齢が16才、最高年齢が19才で平均年齢は18.4才である。同居開始時期は、「出産と同時に」、「出産以後」に同居したものが各1名、「出産以前」からが71名である。無回答が21名あった。

妊娠週数は35週から42週までの幅があり、平均では39週である。子どもの出生体重は、2,320gから3,800gまでの幅があり、平均すると2,975gであった。子どもの出生順位は、第1子が76名、第2子が10名、無回答が8名である。

今回「訪問・聞き取り調査」ができたのは上記対象者のうち41名で、できなかったものが53名である。できなかった理由は、「拒否」18名、「転居先不明」17名、「転居により面接不能」7名、「留守」5名、「その他」5名、無回答1名である。しかし、面接者、非面接者に同居開始時期、妊娠週、子どもの出生体重の際は見られなかった。

2. 「訪問・聞き取り調査」回答者の基本的属性  
回答者である母親の面接は、36名が自宅で、5名がその他の場所で行われた。面接時に同席者がいなかったのは16名で、13名のは同席者がいた同席者の有無が不明なものは12名である。

母親の出産年齢は16才が1名、17才が4名、18才が15名、19才が21名で、平均年齢は18.3才である。相手の年齢は18才から40才までの年齢の幅があり、最頻年齢値は21才、平均年齢は23.2才である。子どもの人数は、「1人」が36名であるが、「2人」というものも5名いる。

### II. 面接調査の回答結果

ここでは、調査対象者のうち面接調査に協力してくれた41名の回答の結果を各設問ごとに具体的に述べていく。（）内の数字は41名を100%とした場合を示す。

#### 1. 妊娠と出産の経過

今回の妊娠に気付いた時期は、「妊娠2ヵ月」というものが22名（53.7%）、3ヵ月」というものが13名（31.7%）、「4～5ヵ月」というものが6名（14.6%）であった。妊娠後最初に受診した時期は、「妊娠2ヵ月」が12名、「3ヵ月」が11名（26.8%）、「4～5ヵ月」が11名（26.8%）、「6～7ヵ月」が5名（12.2%）、「妊娠8ヵ月以降」が2名（4.9%）で、全体では気付いた時期と受診した時期にずれがみられる。

最初の受診は妊娠に気付いてからどれくらい経過してからという質問には、「気付いてすぐ」と答えているものが26名（63.5%）で、他の15名は一定の期間をおいてから受診している。その期間は、「1ヵ月くらい」というものが4名（9.8%）、「2ヵ月くらい」というものが6名（14.6%）、「3ヵ月以上」というものが5名（12.2%）である。

母子手帳の交付をうけたのは「妊娠5ヵ月以前」が26名（63.4%）、「妊娠6～9ヵ月」が12名（29.3%）、分娩時また分娩後」が2名（4.9%）であった。また、「覚えていない」と答えたものも1名（2.4%）いる。

妊娠してから医師の診察を「医師の指示どおり定期的に受けていた」ものは34名（82.9%）であるが、「自分で判断し適当な間隔でうけていた」ものが3名（7.3%）、「数回しか受けなかった」ものが2名（4.9%）、「ほとんど受けなかった」ものが2名（4.9%）と、

妊娠中きちんと医師の診察を受けていないものが7名いた。かれらは診察を受けなかった理由として「どこに行けばいいかわからなかった」(1名)、「医者に行くのがいやだった」(1名)、「費用のことが心配だった」(1名)、その他(4名)と答えている。

妊娠中に母親学級を受講したものは16名(39.0%)、受講しなかったものは25名(61.0%)である。受講したもののうち、数回からなるコースを終了したものは11名(26.8%)、「コースの一部だけを受講した」ものは3名(7.3%)、「1回だけの学級を受講した」ものは2名(4.9%)であった。母親学級をどこで受講したかを参加者にきいたところ、「保健所・市町村など」が7名、「病院・医院など」が11名である。受講したものが16名であるのにたいし、受講した場所を回答したものが18名あるので、受講したもののうち2名は複数ヵ所を受講したことがわかる。

妊娠中に心配になるような身体の問題や異常が「とくになかった」ものが24名(58.5%)、「あった」ものは17名(41.5%)で約4割が問題や異常があったと答えている。また、分娩前後に心配になるような身体の問題や異常が「とくになかった」ものが36名(87.8%)と9割近くが問題や異常がない分娩である。しかし「あった」ものも5名(12.2%)いた。

## 2. 妊娠・出産をめぐる状況

妊娠がわかった時、母親と相手の関係は、「結婚(届出)していた」ものが9名(22.0%)、「同棲していた」ものが7名(17.1%)で、あわせて16名(39.0%)は相手と同居していた。また、「正式に婚約していた」ものが2名(4.9%)、「二人のあいだで結婚の約束があった」ものが8名(19.5%)で、10名(24.4%)はなんらかの結婚の約束があった。残りの15名(36.6%)は「恋人の関係だった」とこたえている。

妊娠した時、母親は「就労」していたものが15名(36.6%)、「無色(家事手伝い・主婦など)」が15名(36.6%)である。「高校生」(7名)、「大学生」(1名)、勤労学生(=「就労+通学」1名)などの学生・生徒が9名(22.0%)、その他が2名(4.9%)いた。相手の男性は「大学生」は1名(2.4%)であとの40名(97.6%)は「就労」していた。

妊娠がわかった時の母親の気持ちは「う

れしさと当惑が半々だった」とこたえたものが一番多く19名(46.3%)であった。また、「うれしかった」(8名、19.5%)とこたえたものがある一方、「とてもショックだった」(5名、12.2%)、「やむおえないという気持ちだった」(4名、9.8%)というものもあり、妊娠について否定的な気持ちと肯定的な気持ちをもったものが約半数づついる。また、「あまりピンとこなかった」というものが4名(9.8%)、その他が1名(2.4%)いる。

妊娠がわかった時、中絶について「全く考えなかった」ものは19名(46.3%)にすぎない。残りの22名(53.7%)はなんらかのレベルで中絶のことを考えている。そのレベルは、「ちらと頭をかすめた」というものが11名(26.8%)、「中絶すべきかどうか迷った」というものが7名(17.1%)、「中絶したいと真剣に考えた」ものが4名(9.8%)であった。このように少しでも中絶を考えたものが産むことになったのは、「中絶のことはすぐ頭から消えた」(4名)、「徐々に産もうという気持ちに変わった」(10名)、「相手から産むように強くすすめられた」(3名)、「中絶するのがこわかった」(2名)、「周囲から産むよう強くすすめられた」(1名)という理由による。

相手に妊娠を知らせた時に、「うれしそうだった」というものは15名(36.6%)であった。17名(41.5%)は「うれしさと当惑がまじっていた」気持ちであったが、5名(12.2%)は「どういう気持ちかわからなかった」。「産んでほしくないようだった」は2名(4.9%)、「はっきり中絶をのぞんでいた」、その他が各1回(2.4%)いた。

親が妊娠を知ったときの反応は、母親の場合「しかたがないという感じだった」ものが、一番多く16名(39.0%)であった。「うれしそうだった」という母親は7名(17.1%)「うれしさと当惑がまじっていた」という母親が4名(9.8%)である。「どういう気持ちかわからなかった」(3名、7.3%)、「妊娠を知らせなかった」(3名、7.3%)と母親の反応がわからないものもあるが、「産んでほしくないようだった」(1名)、「とにかく中絶するようすすめた」(4名)と妊娠を否定的に思っているものがあわせて5名(12.2%)いた。「親はいなかった」というものも2名(4.9%)いる。

父親の場合「うれしそうだった」という

父親は8名(19.5%)、「しかたがないという感じだった」が9名(22.0%)であった。「とにかく結婚するようすすめた」ものも2名(4.9%)いた。「どういう気持ちかわからなかった」(2名、4.9%)、「妊娠を知らせなかった」(2名、4.9%)と父親の反応がわからないものもあるが、「産んでほしくないようだった」(4名)、「とにかく中絶するようすすめた」(2名)をあわせて5名(12.9%)は否定的な反応だった。また「親はいなかった」というものが7名(17.1%)いる。

妊娠や出産によって学業・仕事に何か影響があったかどうかきいたところ、「とくに影響はなかった」と答えたものは15名(36.6%)で、その他のものはなんらかの影響があったと答えている。一番多いのは「仕事をやめた」の13名(31.7%)で、「仕事を休職した」と答えた2名(4.9%)を合わせると、仕事への影響が大きいことがわかる。

学業への影響があったというものでは、「学校を退学した」というものが9名(22.0%)いたが、学校を休学したものはなかった。「学校を退学した」事情は、「自分からそうするほかないと考えた」ものが5名、「どちらかという自分でも望んで」というものが4名、その他が1名であった。退学したあとは無回答の1名を除いて全員がそのまま学業を中断している。

妊娠・出産をしても住むところが変わらなかったのは14名(34.1%)にすぎない。妊娠してまもなく住むところが変わったものは18名(43.9%)、出産が近づいて変わったものが4名(9.8%)、出産と同時に変わったものが1名(2.4%)、出産後しばらくしてから変わったものが4名(9.8%)いる。住所を変更した理由は、「仕事の関係で転居が必要だったから」という理由が4名(9.8%)「子どもと暮らすには狭すぎたから」、「親のそばにいきたかったから」がおのおの2名(4.9%)、「近隣関係がわずらわしかったから」、「子持ちは住めないことになっていたから」が各々1名(2.4%)であった。なおその他が16名(39.0%)、無回答・非該当が15名あった。

妊娠や出産によって相手との婚姻関係が「結婚(届出)をしていて変わらなかった」ものは8名(19.5%)、「同棲していて変わらなかった」ものは1名(2.4%)で、変化がなかったものは9名である。変化があった

もののうち一番多いのは、「結婚(届出)することになった」で、26名(63.4%)で、妊娠を期に入籍したことがわかる。一方、妊娠をきっかけに「別れることになった」ものが2名(4.9%)いる。

妊娠中の悩み(複数回答)についてきいたところ、「とくにない」と答えたものはわずか3名(7.3%)にすぎない。悩みがあると答えたものの具体的な内容としては、「子どもの世話や育て方」(21名、51.2%)「分娩の不安」(18名43.9%)や「子どもの健康」(18名、43.9%)などが多かった。「妊娠中の体調」(7名、16.1%)についての悩みもあるが、「相手(夫)の親との関係」(10名、24.4%)、「自分の親との関係」(7名、17.1%)、「相手(夫)との関係」(3名、7.3%)など、妊娠、出産にともない人間関係が大きく変化したことが反映して悩みとなっていることが特徴的である。

「産まれたあとの生活(経済)」についての悩みも15名(36.3%)あった。さらに「やりたいことができなくなったこと」(9名、22.0%)や、「周囲からの視線や噂」(3名、7.3%)、「自分の将来」(3名、7.3%)、「学校・学業・または職場・仕事」(1名、2.4%)なども悩みとしてあげられている。

悩み事の相談相手(複数回答)は、「自分の親」(18名、43.9%)、「相手の(夫)」(15名、36.6%)、「きょうだい」(7名、17.1%)、「相手(夫)の親」(2名、4.9%)と、親や相手、および双方の血縁者に相談するものが多い。一方「友人・知人」が相談相手になったものも19名(46.3%)ある。「職場の上司・仲間」や「学校の担任」も各々1名(2.4%)いた。「産婦人科医」3名(7.3%)、「保健婦」2名(4.9%)と専門家が相談相手になってくれたが、相談相手は「とくにいなかった」ものも2名(4.9%)あった。

妊娠してから出産するまでの気持ちの変化をきいたところ、「親になることの自覚や期待のほうが強くなった」というもの16名(39.0%)、「親になることの負担や不安のほうが強くなった」というもの11名(26.8%)、「とくにどちらともいえない」というもの14名(34.1%)という回答が得られた。

出産の場合は「自分の親と相談して決めた」ものが11名(26.8%)、「相手(夫)と相談して決めた」ものが10名(24.4%)、「自分で探して決めた」ものが8名(19.5%)、

「相手（夫）の親と相談して決めた」ものが5名（12.2%）、「友達に紹介してもらって決めた」ものが3名（7.3%）、その他が4名（9.8%）であった。

具体的な出産の場所は、「実家から通院・見舞いができるところだった」が20名（48.8%）、「相手の実家から近かった」が12名（29.3%）、「自分の実家からも、相手の実家からも遠いところだった。が7名（17.1%）、その他が2名（4.9%）であった。

出産の費用は「相手（夫）が用意した」ものが17名（41.5%）で一番多い。つぎに、「自分の親が用意した」もの9名（22.0%）、「相手（夫）の親が用意した」ものが4名（9.8%）で13名が親に用意してもらっている。「自分で用意したもの」、「入院助産・出産扶養など公的制度を利用した」が各々1名（2.4%）、その他が4名（9.8%）あった。

出産で入院するときの付き添い（複数回答）は、「相手（夫）」が21名（51.2%）、「自分の親・きょうだいなど」が16名（39.0%）、「相手（夫）の親・きょうだいなど」が9名（22.0%）である。「友達」（2名、4.9%）やその他（3名、7.3%）と答えたものもいるが、「とくにいなかった」と答えたものも1名（2.4%）いた。

出産直後（退院してから）の子どもの世話は、「自分の母親・きょうだい・親戚」が見てくれるというものが25名（61.0%）、「相手の母親・きょうだい・親戚」がみてくれたのは5名（12.2%）を占める。しかし、「相手」がみてくれたのは1名（2.4%）にすぎず、「自分一人で」子どもの面倒をみたものが7名（17.1%）いた。

### 3. 子どものこと、子育てについて

現在の母親と相手の婚姻関係をみると、婚姻届を提出したものは36名（87.8%）である。そのうち夫と同居しているのは33名で夫と離婚したものは3名である。離婚届を提出しなかったのは5名（12.2%）で、そのうち2名は相手と同居後離別しており、3名は初めから相手と同居していない。

婚姻届を提出していない場合、子どもの籍は、「父親が認知している」ものが1名（2.4%）、「父親が認知していない」ものが1名（2.4%）、「自分の親の籍にはいった」ものが2名（4.9%）、その他が1名（2.4%）となっている。

現在の家族構成は、母親と「子ども＋相手（夫）の親」が7名（17.1%）、「子ども＋相手（夫）＋自分の親」が3名（7.3%）であった。母親と「子ども」の構成が3名（7.3%）、「子ども＋自分の親」の構成が3名（7.3%）と現在相手（夫）とはくらしていないものが6名いる。その他5名（12.2%）、無回答も3名（7.3%）いる。

子どもと同居している父親は子どもの世話を「よくする」が19名、「あるていどする」が9名、「ほとんどしない」が4名、「まったくしない」が1名である。

子どもと同居していない父親で、子どもの様子を「時々見にくる」ものは2名しかおらず、ほかは「知ろうとする気がない」が3名、その他が2名である。

養育費の支払に関しても、「定期的に受け取っている」、「時々受け取っている」ものが各1名にすぎず、あとは「約束したのにくれない」が1名、「最初から全くそういう話しはない」が4名、その他1名といった実態である。

ふだんの日中の子どもの世話は、自分がみているというものが多く33名（80.5%）である。保育所に預けているのは7名（17.1%）、自分の母親にみてもらっているのは1名（2.4%）である。

子どもの健康面について心配になることがあったと答えたものは13名（31.7%）、とくになかったと答えたものは27名（65.9%）、無回答1名（2.4%）であった。

最初の乳児検診をうけたのは「1ヵ月検診」で34名（82.9%）、「4ヵ月検診」が3名（7.3%）、まだ受診していないが1名（2.4%）、現在4ヵ月で未受診であるもの1名（2.4%）、現在満1歳以上であるが未受診であるもの2名（4.9%）となっている。

子育てについての悩み（複数回答）が「とくにない」と答えたものは13名（31.7%）で、その他はなんらかの悩みを抱えている。以下にそれをあげると、「子どもの発育が順調でないこと」5名（12.2%）、「子どもの世話のしかたがわからない、心配」7名（17.1%）、「子どもの睡眠や哺乳などがうまくいかずいらいらする」2名（4.9%）、「子どもの育て方で親と意見があわないこと」4名（9.8%）、「子育てで疲れて身体がきつい」5名（12.9%）、「毎日子どもの世話ばかりでおもしろくない」5名（12.2%）、「子どもとだけの生

活で孤独」4名(9.8%)、「相手(夫)が子どものことに責任を感じてくれない」4名(9.8%)、「子どもがいて外出や友達つきあいができない」8名(19.5%)、「子どもがいて学校へいけない」1名(2.4%)、「子どもがいて働けない」7名(17.1%)、「子どもができて経済的に苦しい」13名(31.7%)、「子どものことで住宅に苦勞している」3名(7.3%)、「子どもをかかえて生活がどうなるか不安」6名(14.6%)、その他2名(4.9%)である。

子育ての相談相手(複数回答)は「相手(夫)」(23名、56.1%)、「自分の親・きょうだい」(22名、53.7%)、「相手(夫)の親・きょうだい」(7名、17.1%)と、親やきょうだいと相手に相談するものが多い。「友人・知人」が相談相手になっているものは21名(51.2%)ある。「学校(時代)の担任」も1名(2.4%)いた。「保健婦」2名(4.9%)、「保育所の保母」2名(4.9%)と専門家と相談していると答えたもの、「役所関係の人」の相談しているものも1名(2.4%)、その他も2名(6.5%)いるが「とくにいない」というものも1名(2.4%)いる。

子育てについて、生まれる前に想像していたことといまの現状をくらべて感じることは「想像していたより楽しい」15名(36.3%)、「想像していたよりもつらい」12名(29.3%)、「だいたい想像していたとおり」14名(34.1%)と3分された。

今回の妊娠・出産をふりかえてみて、つらかったこと(複数回答)が「とくにない」と答えたものは16名(39.0%)で、その他はなんらかのことでつらいとおもったことがあると答えている。具体的にその内容をのべると、「出産や育児にいつまでも自信がもてなかった」6名(14.6%)、「産みたくないのに産まなければならなかった」3名(7.3%)、「友達や周囲から特別な目でみられた」3名(7.3%)、「親やきょうだいから避難・反対された」5名(12.2%)、「親やきょうだいと別れてくらすことになった」1名(2.4%)、「学校をやめなければならなかった」4名(9.8%)、「仕事をやめなければならなかった」4名(9.8%)、「相手(夫)が自分を理解してくれなかった」5名(12.2%)、「相手(夫)との関係がぎくしゃくしていた」4名(9.8%)、「相手(夫)と別れることになった」2名(4.9%)、「生活の見通しが立たなくて心細い」8名(19.5%)、「適当な相談相手がいなかっ

た」4名(9.8%)、その他1名(2.4%)である。

逆に今回の妊娠・出産をふりかえてよかったと思うこと(複数回答)をきいたところ、「気持ちがおちついて生活に自信がでてきた」3名(7.3%)、「毎日が充実していて生きがいを感じる」9名(22.0%)、「親としてきちんとしなければならぬという責任感が湧いてきた」22名(53.7%)、「子どもが可愛くて成長が楽しみ」33名(80.5%)、「まわりの友達よりもひとあし先に成長したような気がする」10名(24.4%)、「人間関係がうまく結べるようになったこと」5名(12.2%)、「親になって少しつらいことも我慢できるようになった」20名(48.8%)、「親や周囲への感謝の気持ちわいてきた」21名(51.2%)、「相手(夫)が人間適に成長した」9名(22.0%)、「相手(夫)との関係がよくなった」8名(19.5%)、「自分の親や相手(夫)の親との関係がよくなった」9名(22.0%)、「親しい友だち関係が生じた」14名(34.1%)という回答が得られた。

また、若い時期(10代)に出産したことをどのように思っているかをきいたところ、「子どもがほしいと思っていたのでよかったと思う」15名(36.6%)、「少しとまどったが今ではよかったと思う」15名(36.6%)、「自然のなりゆきでとくにどうとも思わない」4名(9.8%)、「できればこんなに早く産まない方が良かったと思う」4名(9.8%)、その他2名(4.9%)、無回答1名(2.4%)という結果であった。

これからあと何人くらいを産みたいと思うかと尋ねたところ、「もうほしくない」とこたえたのは7名(17.1%)で、「あと1人」が19名(46.3%)、「あと2人」が10名(24.4%)、「あと3人以上」というものも1名(2.4%)いた。「わからない」とこたえたものは4名(9.8%)いる。

子どものことで、福祉・保健その他の公的な機関や制度の利用(複数回答)は「役所(福祉事務所)への相談」5名(12.2%)、「児童相談所への相談」1名(2.4%)、「家庭裁判所への相談」1名(2.4%)、「保健婦等の訪問指導」9名(22.0%)、「養育医療(育成医療)」1名(2.4%)、「児童手当」13名(31.7%)、「児童扶養手当」5名(12.2%)、「入院助成制度」1名(2.4%)、「保育所」3名(7.3%)が利用していた。

子育てをして、社会的に解決してほしいと切実に感じていること(複数回答)は、「子育てをしているあいだは育児手当など経済的な援助がほしい」13名(31.7%)、「子どもがいても住めるような住宅を提供してほしい」5名(12.2%)、「子育てのあいだ仕事が休めるような育児休業制度がほしい」2名(4.9%)、「働きながら子育てができるように保育を充実してほしい」20名(48.8%)、「気軽に子育ての相談にのってもらえるところがほしい」9名(22.0%)、「子育てしながらでも母親も息抜きができるような場がほしい」15名(36.6%)、「子どもがのびのびと遊べるような場所をつくってほしい」21名(51.2%)、「子どもの友達をつくれるような機会がほしい」8名(19.5%)、「親どうしが仲良くなれるような機会がほしい」15名(36.6%)、「子育てや家庭のことを周囲からとやかくいわないようにしてほしい」5名(12.2%)、その他1名(2.4%)という要望があげられた。

#### 4. 妊娠・出産前の状況と現在の生活

母親の最初の性体験(性交)は「中学生」4名、「16歳」17名(41.5%)、「17歳」15名(36.6%)、「18歳以上」が4名(9.7%)、無回答1名(2.4%)である。

具体的な避妊の仕方を教えてもらった相手(複数回答)は「中学校の先生から」9名(22.0%)、「高校の先生から」4名(9.8%)、「親から」2名(4.9%)がおそわっているが、「友人・知人から」20名(48.8%)、「雑誌・本などで」11名(26.8%)というほうが多い。その他が2名(4.9%)、「覚えていない」も3名(7.3%)いる。

妊娠する前に子どもについてどのように考えていたのかきいたところ、「すぐにでも自分の子どもが欲しいと思っていた」のは8名(19.5%)、「適当な時期になったら自分の子どもが欲しいと思っていた」のが21名(51.2%)であった。「いつかは子どもを持つようになるだろうとばくせんと考えていた」のは7名(17.1%)、「自分の子どもをもつことなどほとんど考えたことがなかった」ものが5名(12.2%)いた。

今回の妊娠は「初めて」が29名(70.7%)、「2回目」が11名(26.8%)、無回答1名(2.4%)であった。2回目の妊娠のものに人工妊娠中絶の経験をきいたところ、「ない」8名、「ある」が4名であった。

母親の最終学歴は、「中学卒業」が4名(9.8%)、「高校卒業」が13名(31.7%)、「高校中退」が21名(51.2%)、「短大中退」が1名(3.2%)、その他1名(3.2%)、無回答1名(3.2%)であった。

中学生・高校生のころ、両親の関係が「とてもいい関係」は8名(19.5%)、「まあまあいい関係」は16名(39.0%)と、いい関係だったのは24名(58.2%)である。「どちらともいえない」は5名(12.9%)である。「あまりいい関係ではなかった」は5名(12.2%)、「まったくいい関係ではなかった」は5名(12.2%)で、あわせて10名(24.4%)はいい関係ではなかった。その他は2名(4.9%)である。同じく中学生・高校生のころ、家庭の経済状態が「かなり楽だった」のは3名(7.3%)、「楽な方だった」は11名(26.8%)で楽だというものはあわせて14名(34.1%)である。「どちらともいえない」は15名(36.6%)である。「苦しいほうだった」は7名(17.1%)、「かなり苦しかった」は4名(9.8%)で苦しいというものはあわせて11名(26.8%)である。その他は1名(2.4%)である。

母親が中学生・高校教師だったころの学校生活について「とても楽しかった」が13名(31.7%)、「まあまあ楽しかった」13名(31.7%)、「どちらともいえない」2名(4.9%)、「あまり楽しくなかった」9名(22.0%)、「まったく楽しくなかった」2名(4.9%)、その他2名(4.9%)という回答を得た。

現在、どのような生活上の援助(複数回答)をうけているかをきいたところ、自分の親からは「住居のことで世話になっている」5名(12.2%)、「生活費のことで世話になっている」7名(17.1%)、「お小遣いや品物をときどきもらう」12名(29.3%)、「家事を手伝ってもらう」3名(7.3%)、「子供の世話をしてもらおう」15名(36.6%)、「家事や育児の相談にのってもらっている」13名(31.7%)、「悩みや将来の問題を相談する」7名(17.1%)という援助をうけていることがわかった。しかし、「とくにない」というものも7名(17.1%)いる。親はいないという回答が1名(2.4%)であった。

相手(夫)の親からは「住居のことで世話になっている」3名(7.3%)、「生活費のことで世話になっている」8名(19.5%)、「お小遣いや品物をときどきもらう」10名(24.4%)、「家事を手伝ってもらおう」2名(4.9%)、



「子供の世話をしてもらおう」7名(17.1%)、「家事や育児の相談にのってもらっている」1名(2.4%)であった。「とくにない」というものも11名(26.8%)いる。

現在の母親の就労は、「フルタイムの勤務」が4名(9.8%)、「パートなどの勤務」5名(12.2%)、「家事の手伝い」が4名(9.8%)で、多く(26名、63.4%)は仕事をしていない。

現在の生活費(養育費を含む)は、夫(相手)の収入によるものが24名(58.5%)、「自分と夫(相手)の収入」が4名(6.5%)、「自分の親の収入」が2名(4.9%)、「夫(相手)の親の収入」が3名(7.3%)、「自分の収入」が2名(4.9%)、その他が4名(9.8%)、無回答が2名(4.9%)である。

現在のくらしむき(経済状態)は「かなり楽である」1名(2.4%)、「楽なほうである」9名(22.0%)、「どちらともいえない」11名(26.8%)、「苦しいほうである」13名(31.7%)、「かなり苦しい」5名(12.2%)、無回答3名(7.3%)であった。

住宅は「自分・夫(相手)名義の持ち家」1名(2.4%)、「自分の親の持ち家」4名(9.8%)、「夫(相手)の親の持ち家」8名(19.5%)、「公営賃貸住宅」14名(34.1%)、「民間賃貸住宅」9名(22.0%)、「社宅・官舎・社員寮」3名(7.3%)、その他1名(2.4%)、無回答1名(2.4%)となっている。

最後に「生活のことや子供のこと、妊娠・出産育児を体験して感じたことや困っていること」などについて具体的に寄せられた意見は以下の通りである。

- 育児仲間がほしいが、年齢差があって難しい気がする。同年代の育児仲間がほしい。(出産時19歳、現在22歳)
- 福祉面、市町村によって差がありすぎると感じる。また、対応もまちまちで、きちんと相談にのってくれる所もあれば、相談してもきちんとおのってもらえない所もあり不満。若年出産の友人が自分のまわりにも何人かいるが、皆それまで保健福祉行政といった所と全く関係なかったり知らなかったりして一人で悩んでいる。保健婦が相談にのってくれたり、いろんな施策があることをもっと知らせてほしい。(出産時18歳、現在23歳)

● 第1子はS県で出産した。S県ではミルクとか他にも育児に役立つものをくれたが、第2子出産のときのM県では粉石鹼ぐらいであり良い物がいただけなかった。育児に役立つような者を欲しい。母子寮に住んでいるが、寮の管理人が良くない。専門職の相談できる人をおいてほしい。

(出産時19歳、現在23歳)

● 経済的に苦しいので、経済面の援助(オムツ、ミルクの補助、住宅について)があればと思う。(出産時19歳、現在22歳)

● 育児について気軽に相談できる場、人がいない。子供がいても自分がスポーツなどできる場が欲しい。周りに子供がいないので自分の育児がどうなのか比較できない。夫が遊びたがってばかりいて子供の世話も手伝っていきれない。

(出産時18歳、現在21歳)

● 同じ年頃の子供たちが遊ぶ機会がない。子供がわがまま。(出産時19歳、現在22歳)

● 早くに子どもを持ったので、心配なことが山ほどあるけれど頑張っていると思います。子どもの短所を含めてトータルにわが子をとらえることのできる賢い親にならなければ、と頑張りたい。

(出産時18歳、現在20歳)

● 若い出産はそれなりに病院なんかでも又、周囲からの白い目が厳しかった。経済的にも気持ちの面からも大変だった。夫が妊娠中にも職を転々と換えて不安定で苦しかった。だけど苦しいなりに言い面もある、得することも多いと思う。だって私が40歳の時、この子は20歳だから、得することも多い。育児サークル(育児雑誌)に入っている。(出産時19歳、現在21歳)

● 生活が苦しい。子どもを育てるにあたり、家賃、光熱費、食費等何か一つ免除もしくは援助してもらえるような制度が出来ると良い。出産の費用を退院時、まず自己負担しなければならぬ。20~30万円というまとまったお金を準備することが大変。もう一人子供が欲しくても、そのお金を貯めることが難しい。始めから保健で負担してくれ、不足分を自己負担として欲しい。(出産時18歳、現在21歳)

- 妊娠中、情報、子どもの事で不安になってノイローゼ気味になった。相談する所が欲しい。同じ立場の友達が欲しかった。出産した後もノイローゼ気味になった。一日おきに熱をだしていたが、全部一人でやってきた。現在妊娠中、10月出産予定。(出産時16歳、現在20歳)
- 若くても生むことが大事だと思う。いろいろあったが、なんとかここまで来たという感じ。(出産時19歳、現在21歳)
- 周りの目は十代を意識させられる。よけい頑張らねばと思う。(出産時19歳、現在22歳)
- 母子寮入寮をすすめられたが、交通不便なところ。現在は市営住宅だが、近くには友人や遠い親戚がいて援助してくれている。仕方ない事とは思いますが、今まで生活してきた環境の中で子育てできるような方法はないかと思う。(出産時19歳、現在20歳)
- 友達も欲しいと思うが、村の近くに同年代の友達がいない。かえって若いからと影でコソコソ言われる事もあり、いやだと思うことがある。(出産時19歳、現在21歳)

娠と気付き、ここに至るまでの不安と緊張から開放されこの入寮期間が彼女らにとって一番心の休まる時である。出所後は、相手・親・と生活することもあるが、多くは自立して母子寮、その他で生活することになる。(別冊 愛のいえ)

**慈愛寮の現状**

1990-1992年までの3年間における20才以下の妊婦または母子の入寮状況は、37名(表1)。

相手の年齢は、判明しているもの、18才1名、19才1名、20才1名、21才5名、25才1名、37才1名である。

家庭環境に両親離婚、母子または父子家庭・継母・父酒乱、などがある。本人は、異性交遊や非行に走り、暴力団に巻き込まれているケースが見られる。既婚者の場合は、夫の暴力・行方不明、妻子ある男のため家に帰れない、妊娠を知られては困るなどの理由で慈愛寮に救いを求めてきた者である。

**慈愛寮の存在からの考案**

**2. 母子保護施設(慈愛寮)の意義**

**母子保護施設とは**

対象：保護を必要とする女性相談センター所長が入所を必要と判断した人

内容：保護・自立更生のための生活指導・職業指導など

入所相談：東京都女性相談センターまたは福祉事務所

東京都内に6ヵ所あるが、妊婦のみ受け入れ指導しているのは(慈愛寮)ただ一つ。しかも、全国でただ一つである。

慈愛寮には、さまざまな事情により妊娠した妊婦、または出産後の母子が入所する。妊娠7ヵ月から入所可能であり、出産後3~4ヵ月間、住居を共にする。日々のスケジュールの中で生活の立て直し、妊娠・出産を通しての赤ちゃんに対する愛情の成立を目指している。事実、出産後も本人はおろか相手・家族にまで赤ちゃんをいとおしむ気持ちが養われてくる。病院へ通院し、出産し、分娩後もここへ3~4ヵ月間は安心して生活し、育児と自立への道を歩むことになる。妊

表1 慈愛寮の状況 (1990~1992年) 計37名

年齢	例数	結婚	未婚	学歴	妊婦	母子	生育環境
才					例	例	
	3		3	中卒 2	1		乳児院→学園 強姦(母子家庭) 父子家庭
16	1		1			1	両親離婚
17	9		9	高校中退 2	6	3	継母・母子裂病・母内縁 知能↓ 不順異性交遊(母家)：2例
18	7	1	6	中卒 2	3	4	母不明・両親離婚：2例 本人施設、母売春、父暴力団、 少年院・夫暴力・母子家庭：2例
19	6	1	5	中卒 1	4	2	父酒乱・相手とスナックで →妊娠 本人窃盗歴 相手窃盗・夫暴力
20	11	2	8	中卒 1 高卒 2	8	3	妻子ある男性・両親離婚 クラジミア感染・夫暴力 相手行方不明：2例 独身寮で行き先なし

相手の年齢：18才1例、19才1例、20才1例、21才5例、25才1例、37才1例

- 1)入寮に至るまでの経過の追跡調査は、若年妊娠の早期発見・妊娠予防対策に必要である。
- 2)青少年に、福祉・医療との接点の場のPRが必要である。
- 3)提供される・利用することのできる福祉関係のPRが必要である。
- 4)相手の年齢から見て、社会人と思われる男性の性教育の場を、やはり早急に検討する必要がある。(幼児期からの指導・適齢期

の再性教育)

- 5) 慈愛寮の背後に、ここに到着できなかった多数の悲惨な例、あるいは家族等により、一応、無事に処理されている若年妊娠が多々あること、家庭・本人に問題のあるケースばかりでないことも重視する必要がある。
- 6) 施設間の連携：全国にある婦人収容施設は、多種多様な問題を抱えた婦人の入所であり、若年妊娠の対応には応じ切れぬ状態にある。慈愛寮のような施設の増設が望ましいが、乳幼児と医療施設との連携を試み、若年妊婦の妊娠期間の収容に乳幼児を利用し、子供と接しながら妊娠・出産・育児の心を学んでいく、妊娠中の定期診察・出産を関連病院に以来し、出産後再び生活を共にする。退所後も、自立を目指す期間、児の保育を依頼することも可能である(九州の慈愛園、仙台の長池産婦人科・仙台乳児院の試案)。
- 7) 養子縁組の問題：児の幸せを願って、関係者はこころを痛め、よりよい道をと努力するが、いろいろ難しい。出生直後から親子の絆をとう願う受け入れ側と関係者(家族・医師)、後で起こる面倒を恐れる公的機関(乳児院に収容してから所定の手続きを終えて契約する)とある。宗教の関係であろうが後で何があるかと、その子を受け入れる傾向から外人の受け入れが多い。河野によれば、(表)のごとく数多くの養子縁組に取り組んでいる。福祉関係の組織でも(資料4-2-2、3)のごとく養子縁組に取り組んでいる。

	分娩時年齢	職業	相手年齢	職業	初診時週数	養子先
1	11才	小6	13才	中1	31週	7才幼
2	12	小6	13	中1	38	親戚
3	14	中3	17	高2	39	在日7才幼人
4	14	中3	17	高3	30	7才幼
5	15	中卒直	20	社会人	32	他県(9月)
6	16	高1	18	社会人	31	県内
7	16	高2	16	社会人	25	他県
8	16	社会人	18	社会人	29	在日7才幼人
9	17	高2	24	社会人	38	7才幼
10	17	高2	16	高2	30	在日7才幼人
11	17	高2	15	中3	34	捜市中
12	18	高2	22	社会人	35	日本人と7才幼人夫婦
13	18	高3	20	社会人	32	他県
14	18	高3	19	社会人	27	在日7才幼人
15	18	大1	22	大4	6	7才幼
16	19	専学生	17	高2	33	7才幼(2才)

考察：

全国的な思春期保健活動の調査によると、かなり広範囲に思春期外来・相談・その他の施設の広がりは見られているが、本当に青少年の要望しているものを満たしているとはいえない。相談所・相談電話などの時間帯・相談日の増加、また、施設の存在を子供達にPRする努力。これらにより、青少年の危機の早期発見・早期援助につながると思う。また、PTA・学校・教育委員会との連携、その他、立て割り行政の中にある関係者との調整が現場から強く要望されている。

青少年の性意識・性の自立に関する調査からは、表面的な知識はあっても基本的なところで不正確さが見られる。避妊に関しては、やはり、必ず使ったのはほぼ半数、時々使った、全く使っていないが30~40%を越している。女性が自分自身を大事に、男性が相手を知り大切にするという根本的な考えが身に付いていない。

婦人保護施設、若年出産者の調査結果を見ても、その活動には、関係部門との連携・子供達がこのようなシステムをどのように知ることができるか・子供達への有効なPRの必要性を痛感する。また、良い環境に置かれれば、予定外の妊娠であっても、幼くても、生み育てる意欲の湧上ること、周囲も巻き込んで愛情の育ていくことを重視したい。その場合若年妊産婦とその母との母子関係のよいことは更に好結果をうむといわれる。

これらを重視すれば、いわゆる性教育と同時に、もっときちんと受精・妊娠・出産・育児の過程を中学・高校で教えるべきであり、少産時代、子供を知らない世代に福祉体験学習を勧めるのも一理あるかもしれない。

東京思春期保健学会の発足。(1992、6.6)

①少産時代における新しい母子保健対策、②健全母性育成事業、③個別指導体制による思春期保健の推進、④関係団体および地域行政との連携、この4点を起点に思春期外来の必要性が取り上げられていた。そのためには思春期の女子の心理を十分汲み取れる医師や看護職が必要である。東京都内の産婦人科医が思春期に新たに取り組もうとして発足した会である。思春期妊娠も増加している今日、東京思春期保健学会の発足は、開業医が地域での青少年との直接の交流、親の教育、学校当局には相談医として、保健所とは連携プレーetc.の役割を通して、思春期の問題解決に一役買うことになる。

文 献：

- 社会福祉の手引き、1992：  
東京都福祉局総務部調査課・編、  
東京都情報連絡室、1992
- 東京女性白書'92、  
東京都行動計画10年の歩みと今後の展望、  
平成3年度東京都生活文化局  
女性青少年部女性計画課・編、  
東京都情報連絡室、1992
- 現代青少年と性をめぐる社会的諸問題について  
-成熟ギャップをどう越えるか-、  
(東京都青少年問題協議会答申)  
東京都生活文化局、1988
- 高校生の性知識・意識・行動に関する調査：  
調査・研究結果報告書、  
東京都母子保健サービスセンター、1993
- 中学・高校・大学生の性行動白書：  
日本性教育協会・編、小学館、1988
- 児童・生徒の性、1990年調査：  
東京都幼・小・中・高性教育研究会、学校図書、1990
- 若年者の避妊をめぐる諸問題：玉田太郎氏  
周産期医学、17、184 東京医学社、1987
- 十代の妊娠：  
林 謙治、自由企画・出版1987
- 乳幼児精神医学への招待：  
堀口雅子、別冊、発達、9、  
ミネルヴァ書房、1989
- 10代妊娠にみる諸問題：  
河野美代子、産婦人科の世界、43、319、1991
- 若年妊娠の取り扱い：  
片桐清一、日本産婦人科学会、43(4)N-71、1991
- 我が国における思春期妊娠、第2回調査報告：  
佐藤恒治他、日本産婦人科学会、37、1977、1985
- APPC(思春期妊娠危機センター)開設1年の報告、  
(社)家庭養護促進協会、大阪事務所、1990
- 若年妊産婦の実体と育児の状況(第1報)  
大阪市保健指導研究会母子保健部、1988
- 若年妊産婦の実体と育児の状況(第2報)  
大阪市保健指導研究会母子保健部、1988
- 特集・混乱する「性教育」、  
Sexual Science、11(5)、  
日本アクセル・シュプリンガー社、1992
- 地域と学校の総合的な精神保健活動を目指して、  
健全な思春期を願って：  
翠川洋子、保健婦雑誌、46、623、医学書院、1990
- 特集、特別養子、細川・菊田他、  
ジュリスト、894、44~66、有斐閣、1987
- 特別養子制度の成立をどう受け止めるべきか、(中)  
米倉 明 ジュリスト、89、86、有斐閣、1987
- 特別養子制度の成立をどう受け止めるべきか、(下)  
米倉 明 ジュリスト、896、90 有斐閣、1987



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 要約

思春期の性行動の中でも心身共に影響力の大きい、そして、次の世代、即ち、生まれ出た子供たちの幸せにもつながる若年妊娠。もはや、特定の、問題児の非行としての性交・妊娠ではなく、身近な、何処にでもいる子供たちに起こり得る問題である。幼児期から、性と性・命の尊さを、しっかり認識させるとともに、若年妊娠について、早急に適切な支援対策を講じることが必要である。今回、思春期にかかわる組織の全国的調査・青少年の性意識調査、若年妊娠の医学的・社会的見地からの調査を行った。その結果得られた思春期対策の充実度と問題点、青少年の性に対する認識、若年妊娠の現状と問題点と、今後の対策を報告する。